

論文要約

論文題目 蘭学と漢字 ―医学語彙の研究―

申請者 西嶋 佑太郎

本論文は、近世後期の蘭学者による漢字を使用した訳語、なかでも医学語彙の作成方法を論じるものである。杉田玄白ら『解体新書』(1774 年)をはじめとして蘭学者による翻訳書、医学書が多く著された。蘭学者による訳語には「神経」「盲腸」などの二字以上の漢語のほかに「腺」「臍」のような造字を伴う訳語もある。本論文では、蘭学者による訳語の作成方法を、オランダ語の原語と比較対照することで分類・記述する方法を提示した。さらにその方法が漢字一字の訳語にも適用できることを示した。以下、各章ごとに要約を示す。

序論

蘭学に対するまなざしには、杉田玄白の『蘭学事始』にある『解体新書』翻訳の苦心譚、そしてそれを紹介した福沢諭吉の言説が影響しているという先行研究を紹介し、蘭学や訳語の研究はおおむね『解体新書』を相対化する方向へ進展している傾向を述べた。しかし、特に訳語の研究においては、『解体新書』をはじめとした翻訳書の語彙とオランダ語とを比較して検証するという視点が不足しているという現状の問題点を指摘した。これを踏まえて本論文の目的、方法および各章の概要を説明した。

第一部 蘭学者の一字訳語と漢字

本論文では、蘭学者の訳語のうち、「腺」「臍」(宇田川榛斎『医範提綱』(1805 年))のような漢字一字によるものを一字訳語と呼称する。これと二字以上の漢語とを合わせて蘭学者の訳語作成方法を記述するためには、一字訳語の具体例が不足している。そのため第一部(第一章および第二章)では、一字訳語の使用が指摘されていながら、その実態が不詳であった蘭学者、海上随鷗(稲村三伯)、野呂天然による一字訳語の概要を示した。

第一章 海上随鷗の造字法

海上随鷗(稲村三伯、1759-1811)は、近世後期の蘭学者で、蘭日辞書『波留麻和解』の編纂に従事したことで知られる。海上随鷗へと改名した後に『八譜』などの著作を残したが、造字が多用されていることもあって、これまでほとんど研究の俎上に載せられてこなかった。第一章では海上随鷗の事績、著作について筆者の既刊論文を踏まえながら概説したうえで、海上随鷗の医書から収集した造字を含む一字訳語 1509 語(字)についてその概要を述べた。

海上随鷗の一字訳語は 9 割以上が既存の漢字にはない造字であり、そのほとんどは解剖学用語である。造字は、「行(動脈)」「脊(静脈)」「走(腺)」などといった独自のカテゴ

リーに基づく偏旁を用いることが基本骨格となっている。この背景には、原語の解剖学用語が後項に共通する要素をもつ体系的な命名に基づくことと、漢字の偏旁による構成とが並行的な関係にあるものと思われた。このような基本骨格のうえに、造字に基づく二次的な造字もしばしば行われ、その際に構成要素を省略する省画が行われるために、文脈の助けがないと意味をとりづらいものが存在することを示した。

第二章 野呂天然の医学用語における漢字の転用について

野呂天然(1764-1834)は海上随鷗と同時代の蘭学者で、解剖学書『生象約言』『生象止観』で一字訳語を使用した。野呂天然の使用する一字訳語は、造字を一切使用せず、既存の漢字を転用に徹している点が特徴的である。第二章は、野呂天然の事績などから野呂天然の用語の背景にある思想を明らかにしたうえで、転用による一字訳語を分類した。

野呂天然の転用の方法には、既存の字義の派生である「借用」と、既存の字義を離れ会意字として再解釈して字義を付与する「会意」という二つの方法が見られた。「借用」も「会意」も大槻玄沢『重訂解体新書』（稿本）においてそれぞれ「臄」「脰」のように先行する例があるものであるが、野呂天然の一字訳語は数が多く、思考過程が記されている点で一字訳語の分析に適している。野呂天然の転用の分類をもとに、冷僻字（めったに使われない漢字）の派生（「借用」）と造字との間に「会意」の類型を加えることで、蘭学者の一字訳語を漢字の使用方法という観点から見通しよく再分類することができることを示した。

第二部 蘭学者の訳語作成方法

第二部（第三章、第四章、第五章）は蘭学者の翻訳資料を対象に、オランダ語の原語と訳語を形態素ごとに比較することで、訳語作成方法を分類した。これは杉田玄白ら『解体新書』で提示された訳語作成の三訳法（現代でいう直訳、意訳など）から出発するのではなく、あくまでもオランダ語と訳語との比較から分類しなおすことに主眼がある。そのことにより、形態素ごとに訳して結合する模倣法（第四章）の存在を記述しやすくなり、また第二部の方法が一字訳語にも適用できることが明らかになった（第五章）。

第三章 大槻玄沢『重訂解体新書』の訳語作成方法

大槻玄沢『重訂解体新書』（1826年刊）は、『解体新書』（1774年）の訳文、訳語を改訂しただけでなく、「翻訳新定名義解」という編が付属している。この「翻訳新定名義解」は『重訂解体新書』に出現する解剖学用語に対して原語の音写、形態素への分割、それぞれの語義解釈、最終的な訳語への思考過程が記される点で、蘭学者の訳語作成方法の分析に最も適しており、分析の定点となりうる資料である。第三章は「翻訳新定名義解」に掲出される語について、オランダ語原語と訳語との対応関係から訳語作成方法を分類した。「翻訳新定名義解」には大槻玄沢による三訳法の分類も記されるが、本論文の分類結果と照らし合わせると大槻玄沢の分類には判断がゆれているものがあり、本論文のような細かい分類の方が記述に適していると考えられた。

また大槻玄沢は単にオランダ語を形態素ごとに翻訳しているのではなく、訳語の作成においてさまざまな工夫（翻訳行為）を行っていることが確認できた。オランダ語、漢語の

両面から訳語を模索した点、冷僻字による一字の訳語を創出し、なかには「脛」「肫」のような創造性の高い語を用いた点などは、『解体新書』にはない大槻玄沢の特徴と言える。

第四章 訳語作成方法からみた『解体新書』の位置

第四章は、杉田玄白・前野良沢ら『解体新書』を対象に第三章の方法を援用して分析した。訳語作成方法の中でも、特にオランダ語複合語を形態素に分解して訳して結合する模借法（漢語による模借法）に着目した。『解体新書』の時点で漢語による模借法が既に半数近くを占めていること、『解体新書』以前の洋学資料等には漢語による模借法はほとんど見えないこと、『解体新書』とほぼ同時期の訳出である長崎通詞本木良永・松村元綱による天文学書『天地二球用法』には漢語による模借法が見られることを示した。『解体新書』の訳者の一人前野良沢は長崎に修業にいつていることなどから、『解体新書』における漢語による模借法の多用には、本木良永らの影響があることを推定した。『解体新書』以後に蘭学塾の盛行や蘭化亭訳文式という逐語訳的な翻訳法が継承されたことから、漢語による模借法が後代に普及したと思われる。このような訳語作成方法、特に漢語による模借法の観点から『解体新書』を位置づけ直すことが出来ると考えられる。

第五章 翻訳方法としてみた医学用語の造字

第一章の海上随鷗の著作『八譜』のうち、筋肉の名称を述べる篇は、他の医書から模借法の形で訳語が示されているため、原書と原語および造字の作成意図を推測できる。第五章はこれを利用して、造字に対して第三章の方法を援用して分析し、造字行為を翻訳方法としてとらえることを試みた。

造字は漢字一字であるが、構成要素の集合と考えれば、二字以上の漢語と同様の分析が可能であった。翻訳における二字以上の漢語と造字との違いは、オランダ語の語や形態素に漢語をあてるか、漢字の構成要素をあてるかというスタイルの差と考えられる。これにより、造字行為も翻訳方法の一つ様式として、蘭学者の訳語作成方法の中に位置づけられることを明らかにした。また造字というスタイルが訳語が不安定なものに限定的に選択された要因として、造字の字音(語形)が、字形に対して副次的である点を指摘した。

結論

各章の要旨をまとめ、本論文の意義および今後の課題を述べた。